

中国の大学改革

小林 立

ここに御紹介する「中国の大学改革」は、以下にかかげる諸論文を読んで、まとめた文章である。

清华大学革命委員会 北京大学革命委員会
《巩固和发展大学教育革命的成果》（「紅旗」1974年第1期）

北京大学，清华大学大批判組
《教育革命的方向不容篡改》（「紅旗」1975年第12期）

中国共产党朝阳农学院委員会
《大是大非問題一定要辯論清楚》（「紅旗」1976年第1期）

复旦大学大批判組
《教育革命“拖四个现代化的后腿”吗？》（「紅旗」1976年第1期）

北京大学，清华大学大批判組
《回击科技界的右傾翻案风》（「紅旗」1976年第2期）

辽宁大学大批判組
《不許为修正主义教育路线翻案》（「紅旗」1976年第2期）

尚，雑誌「紅旗」は，中国共産党中央委員会主催による月刊誌である。

（以上）

目 次

訳者はしがき

- (一) 上部構造の社会主義革命
- (二) 毛沢東主席の指示
- (三) プロ文革以前の“17年”
- (四) 大学生募集の改革
- (五) 大学教育の改革

- (六) 大学卒業生の就職
- (七) 労働者階級による指導
- (八) 教育改革の継続的發展

訳者はしがき

プロレタリア文化大革命は、教育の分野から始まった。1966年、北京市の高校生が詰め込み授業と大学入試制度に対して批判を行い、毛主席の支持と激励を得た。学校は学生募集を停止して、教育の革命にとりくんだ。高校生は紅衛兵として文化大革命の先兵となって活動した。

世界を震動させたプロレタリア文化大革命は、毛主席が自ら発動し指導した修正主義路線にたいする革命運動であると言われる。教育革命はその発端となった分野であり、プロレタリア教育革命の路線の修正主義教育路線に対する勝利がうたわれている。

中国の大学は、1966年、67年、68年、69年の4か年間、学生の募集を停止して、大学改革に取り組んだ。そして、1970年、大学は学生の募集を開始した。そこに現われた大学は、プロレタリア文化大革命(以下、プロ文革と略称する)の嵐に鍛えられて産れ出た社会主義の新しい事物である。中国の大学は、学生の概念が一変し、それにつれて大学のあり方も一変した。プロ文革以後に再生した大学は、文字通りの教育革命と称するにふさわしい新しい事物であると言えるのではないかと思う。

教育革命の具体的な方策として、主なものとして次の四つを挙げる。

1. 実践の経験をもった労働者・農民の中から学生を選抜する。
2. 三大革命運動(階級闘争・生産闘争・科学実験)の中で、思想的に紅くて、業務に精通したプロレタリア革命事業の後継者を育成する。
3. 教育の質の問題に正しく対処して、知育優先を批判する。
4. 教育革命は労働者階級が指導しなければならない。

中国の教育革命運動は、社会主義革命と建設に適應した大学を目指して、古今東西どこにも存在しなかった新しい大学を目指している。まだ数年の経験を積んだにすぎないが、不断に改革運動は続けられている。簡単な紹介を行うことにしたい。

(一) 上部構造の社会主義革命

1957年、生産手段の所有制における社会主義的改造に中国は基本的に成功した。

続いて、思想的政治的領域で生産手段の社会主義的所有に符合するよう社会主義革命を推進している。それは上部構造における階級斗争であり路線斗争である。

中国は意識の形態を含む上部構造の領域の社会主義革命を進めている。教育革命もそのような上部構造の変革の一環として把握されている。

教育は上部構造の重要な構成部分である。社会主義の中国における学校は、プロレタリア独裁の道具として、社会主義の経済的發展に適応すべきであり、それを促進すべきであるとされている。教育の領域は上部構造における社会主義革命の一環として重要な戦線を形成するのである。イデオロギーの分野における社会主義革命はまだ終ってはいないし、社会主義という歴史的段階全体を通じてなお長期にわたる継続革命が必要であるとされる。

それでは文化大革命前の教育戦線はどういう状況にあったのか。当時、劉少奇一派は、権力を利用して修正主義路線を推し進めて、学校はブルジョア知識人に統治されることとなって、ブルジョア独裁が行われていた。

プロレタリア文化大革命は劉少奇の修正主義の教育路線を粉砕した。労働者階級が学校に進駐して管理し、ブルジョア知識人による学校統治の事態を抜本的に改革することに着手した。すべての学校は教育をプロレタリアの政治のために服務し、生産労働と結びつけるという方針をまじめに貫徹させた。学校をプロレタリア独裁のための道具に改造することに努力し、門を開いて学校を運営し、学ぶことを主としつつ、あわせて他の事をも学ばせるようにした。すべての仕事は学生の思想を変革することと結びつけ、学生を社会主義の自覚をもち、教養のある労働者に育成して、プロレタリアの革命事業の後継ぎを育成するよう努力している。

広範な知識青年が農村・山村へゆき、労働者・農民と結びつく道歩んでいる。

大学は実践の経験をもった労働者・農民の中から学生を選抜し、卒業したら

また生産の実践にもどってゆく。

このような斬新なプロレタリアートの教育制度がさまざまな試みを経て、次第に打ち建てられている。教育戦線のこの大きな変革は文化大革命の豊かな成果の一つであり、この方向こそ全く正しいものである、とされている。

(二) 毛沢東主席の指示

中国は1975年1月、新憲法を採択している。新憲法は、序言と30条から成るが、第一条と第二条を引用すると、次の通りである。

第一条：中華人民共和国は労働者階級が指導する労・農同盟を基礎としたプロレタリア独裁の社会主義国家である。

第二条：中国共産党は中国人民全体の指導の中核である。労働者階級は自己の前衛である中国共産党を通じて国家に対する指導を実現する。マルクス・レーニン主義、毛沢東思想は我国の指導的な思想における理論的基礎である。

以上に見る通り、新憲法の条文にも記されているが、毛主席の威信と指導性は、我々外国人の想像を絶していると言ってよい。

中国のプロレタリア教育革命運動についても、毛主席の指導を抜きにしては考えられない。そこで毛主席の教育革命に対する指示の主なものを紹介することにしよう。

“我々の教育方針は、被教育者をして徳育・知育・体育の各方面を発展させ社会主義の自覚をもち、教養ある労働者にするというものでなければならない。”（1957年）

“教育はプロレタリアートの政治に服務すべきであり、生産労働と結びつけねばならない。”（1958年）

“学校制度を短縮し、教育を革命しなければならない。ブルジョア知識人が我々の学校を支配している現象をこれ以上続けるべきではない。”（1966年<5.7指示>）

“実践の経験をもつ労働者・農民の中から学生を選抜し、学校で何年か学ん

だ後、また生産の実践にもどってゆくようにすべきである。”（1968年“7.21”指示）

“古い教育制度を改革し、古い授業の方針と方法を改革することは、今回のプロレタリア文化大革命の極めて重要な任務の一つである。”

“学校のすべての仕事は思想を变革させることにある。”

“青年は確固たる正しい政治の方向を最優先させるべきである。”

“階級斗争は君たちの必須科目である。”

“古い教育制度は人材をだいなしにし、青年をだいなしにする。私は賛成できない。”

“労働人民は知識人化し、知識人は労働者化せねばならない。”

（三）プロ文革以前の“17年”

中国の建国初期の教育は、国民党政府から受け継いだ半植民地・半封建的な教育だったといわれる。党委員会の書記が派遣され校長は交代したが、教師、教育制度、教育内容、教育方法などは変えられなかった。

建国後まもなく、毛主席は旧解放区における教育の経験を踏まえて、段階的に慎重に旧来の学校教育の事業と社会文化事業の改革を進めようという指示を出した。しかし劉少奇一派はこれに反対して「基本的に従来通り」というスローガンを出して、国民党の教育制度に触れることを許さなかった。しかも、ソ連の方式をそっくり真似して、本来、資本主義的・封建的だった教育の中に更に修正主義を大量に持ち込んだといわれる。

1957年、毛主席は社会主義経済の基盤を発展させ、プロレタリア独裁を打ち固めるという要請に基づいて、劉少奇一派の修正主義を反駁して、次のように

規定した。

“我々の教育方針は、被教育者をして徳育・知育・体育の各方面を發展させ、社会主義の自覚をもち、教養ある労働者にするというものでなければならぬ。”（《人民内部の矛盾を正しく処理する問題について》）

毛主席は1958年、更に次のように指示している。

“教育はプロレタリアートの政治に服務すべきであり、生産労働と結びつけねばならない。”

毛主席の教えに従って、広範な革命的教師と学生そして労働者、農民大衆は教育革命を捲き起した。ところが、革命がはじまるやいなや劉少奇一派はすぐ冷水をぶっかけて押しつぶした。彼らは反撃に出て、教育戦線におけるブルジョアジーの支配を強化した。「教授による学校運営」、「知育第一」、「専門第一」、「学問して出世する」等々の修正主義の代物を更に系統化して、ブルジョア的権利を拡大し、エリートの養成をますます合法化、制度化した。

1962年から文化大革命直前まで、教育革命に対して毛主席は一連の指示を出して、劉少奇の修正主義の路線を批判した。毛主席は旧い教育制度について、「人材をだめにし、青年をだめにする」と憤慨し、「賛成できない」として、改革を要請したが、劉少奇一派は毛主席の指示を実行しようとせず、いわゆる「二種類の教育制度」なるものを推進して、ブルジョアジーによる学校運営を続けようとはかった。

こうして、1966年の《5.7指示》の中で、毛主席は次のように指摘している。

“学校制度を短縮し、教育を革命しなければならない。ブルジョア知識人が学校を支配している現象をもうこれ以上続けることはできない。”

このような経過から見て、プロレタリア文化大革命が教育の分野から始められ、文革の尖兵として紅衛兵が登場することになったのも不思議はない。

社会主義中国を修正主義の路線に変色させないためには、革命事業の後継者の養成が重要課題となる。プロ文革以前の教育はブルジョアのもので、プロレタリアのものでなかったとされる。学校はプロレタリア独裁のための道具となつて、プロレタリア革命事業の後継者を養成しなければならないのである。後継者の養成をめぐる、青少年の争奪がおこなわれ、この課題は、百年、千年、

万年の大計であると強調されている。

社会主義の自覚をもち、教養ある労働者に学生を育成する方針は、学校がブルジョア独裁の道具となっており、ブルジョア独裁が行われては貫徹されない。プロ文革の後、学校の大変革により、プロ独裁の道具にすることによって、はじめてプロレタリアの革命事業の後継者を育成できることが証明された。それでも文革後の10年間は、プロレタリアートとブルジョアジー、マルクス主義の路線と修正主義の路線とが、繰り返し斗争を行って来ている。教育は何のために行われねばならないか、いかなる人間を育成しなければならないのか、そのためにいかなる教育路線、制度、内容、方法が採られるべきかをめぐる革命運動である。それは中国の社会主義建設の運命を左右する百年、千年、万年の大計であると考えられている。

教育の領域において、マルクス主義かそれとも修正主義の路線を進むかという路線斗争は、その教育の方法に直接表現されると考えられている。マルクス主義は、従来、方法と路線は切り離すことのできないものであると考えている。階級路線から遊離した教育方法はこれまでなかった。教育方法は、一定の教育路線によって決定され、そのために奉仕するものである。プロ文革前は、学生募集から就職、授業から試験に至るまで、その方法は修正主義の教育路線に支配され、そのために奉仕しなかったものはない。

大学生の募集方法はこれまで高校卒業生の中から直接学生を募集し、合格不合格は点数の高低によって決定された。修正主義の教育路線は、労働者・農民の子女を大学から閉め出すために、このような方法を採用していたのである。

古い授業方法は階級斗争と生産斗争そして労働者・農民大衆から遊離しており、学生を教室と書物にしばりつけ、スコラ哲学をやっていた。

講義方法は詰め込み式で、学生は、終日精神を緊張状態においていた。授業全体が死んだようになり形式主義的であった。生気はつつつとして健康なものすべておしつぶされ、学生は死者と外国人に鼻づらをつかまれて歩くかされ、独立思考と創造的精神は窒息していた。こういう授業方法は2千年前の孔子から伝わり、ブルジョアジーによって受け継がれた「羊に点数をつける」というやり方である。

過去の試験について見ると、敵に対するような方法で学生を扱い、珍問、奇問を出題して奇襲攻撃を行っていた。試験の回数が多く、あたかも試験場は法廷であり、試験官は裁判官のようであった。進級、落第、卒業等はすべて一枚の答案によって決定されるので、学生は死にもの狂いで「優」を取ろうとした。

就職については、学生は大学を卒業すると、もはや労働者・農民・兵士になろうとしない。それ故、実質的には学生を「学問して官吏になる」という道を歩るかせ、彼等を労働者・農民・兵士から分離させていたわけである。

以上に見るような教育の方法は、修正主義路線が、都市と農村、工業と農業、肉体労働と精神労働という三大差別を維持し拡大しようとしてることと符合している。プロレタリア教育革命を実現するには、修正主義の教育路線の支配を根こそぎ止めさせねばならないし、過去の修正主義の教育方法を徹底的に改革せねばならない。奇談怪論の製造屋は、それらの古い方法を復活しようと妄想している。それは建国後17年間支配的な地位を占めていた修正主義の教育路線を復活しようとするものなのである。

(四) 大学生募集の改革

毛主席は1968年“7.21”指示の中で次のように言っている。

“プロレタリアートの政治をすべてに優先させ、上海機械工場が労働者の中から技術者を育成した道を歩まねばならない。実践の経験をもった労働者・農民の中から学生を選抜して、学校で何年間か学んだ後、また生産の実践の中にもどってゆくようにしなければならない。”

1970年から、中国の大学は学生の募集をはじめた。労働者・農民・兵士出身の何千何万という学生が大学に進み、革命的な教師と共に、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を用いて大学を改造し、思想的に紅く、専門に精通しているという道に沿って成長している。他方では、労働者・農民・兵士の中から教員が出て大学の講義を行うという変革がすすめられている。高校を卒業した知識青年は、農村・山村・工場・解放軍に就職する。そこで何年間か実践の経験を積んだ知識青年の中から、大学生を募集する。これは高校卒業生が、直接大

学入試を受験し、試験の点数だけで合格していたのとはまったくちがっている。しかも大学卒業後はふたたびもとの職場へ帰ってゆくというやり方を採っている。大学を卒業すればエリートになれるというゆき方とは、全く異質である。卒業後、絶対多数の大学卒業生は、労・農・兵が自分たちを必要としていることをしっかりと胸に刻んでいて、生き活きとした階級斗争、生産斗争、科学実験（三大革命運動）の第一線にもどってゆき、大衆と一体となっている。労・農・兵大衆もこのような大学卒業生を称賛し、歓迎している、という。

解放後、中国の労働者・農民大衆は国家の主人公になった。しかし文革前の17年間は修正主義的教育路線の支配のもとに、広範な労・農・兵は大学から閉め出されていた。プロ文革がこの状況を打ち破った。

労働人民は物質的・精神的富の創造者であるが、過去数千年にわたる階級社会では、文化・教育を享受する権利を奪われていた。毛主席の“7.21”指示により、大学は学生募集の制度を改革し、労働者・農民の幾千年来の願望を実現した。学校が誰に向かって門を開いて、どういう学生を募集するかは、教育の階級性に直接関係する。労・農・兵の中から大学生を選抜するのは、プロ文革がもたらした重要な成果の一つであり、古今東西の教育史上における革命である。

労・農・兵の中から大学生を選抜するこの新しいやり方は大学の様子を一新させた。

学生が工場・農村で何年か生産労働に参加して実践の経験をもっていることは、彼らが大学で学ぶ利点となっている。

彼らは社会と労働者・農民に学ぶことによって、自覚が高まり、豊かな知識をもち、進むべき方向を明確にしている。これは誰のために学ぶかという問題を解決するためのよりよい思想的基礎をすえたのである。同時に、彼らは三大革命運動の実践的経験をもっているので、文科系であれ理科系であれ、理解力と実践的能力がすぐれている。

労・農・兵出身の学生は大学に入学し、大学を管理し、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想で大学を改革し、教育革命の増援軍となっている。

このようなことは過去の大学生にはなしえないことである。

学生募集の制度的改革は教育革命の重要な内容をなすものである。大学生が労働者・農民・兵士から来て、また労働者・農民・兵士の中にもどってゆくことは、教育をプロレタリアの政治に奉仕させ、生産労働と結合させる方針を貫徹する道を開いたもので、労働者階級の広大な新しい知識人の部隊を養成し、上部構造の領域でプロレタリアートがブルジョアジーに対する全面的な独裁を実施し、強固にするために重要な意義をもつものである。

大学がどういう人を募集し、どういう人を養成するのかが教育の政治的方向を直接体现するものである。

文化大革命以前の古い大学入試の制度はブルジョア知識人が学校を支配するための関所であった。表面的には「評点の前には皆平等である」とされていたが、実際はブルジョアジーによる文化独裁であり、広大な労働者・農民・兵士およびその子女を大学から排除するためのものであった。それは「学問して官吏になる」、「知育第一」という間違った道を青年に歩ませ、エリートへの階段に向わせるものであった。そのような一連の入試制度や教育路線は社会主義の事業にとって不必要なものである。

毛主席が自ら始め指導したプロレタリア文化大革命は、まず文化・教育の陣地に手術をほどこした。今度の大革命が始められた時、紅衛兵が古い大学入試制度に造反したことも決して偶然ではない。

学生の選抜にあたっては、プロレタリアートの政治を最も優先させて、政治的資質を首位におき、実践的経験の意義を十分に重視しなければならない。このような前提のもとに妥当な教養試験を補足することが必要である。しかし、どのような教養試験を行うかは、方法の問題だけでなく路線の問題が含まれている。古い入試と教養試験の異いをはっきりさせねばならない。

学生を選抜するにあたり主要なものは政治的条件と実践的経験である。教養試験を行うのは推薦対象の実践的経験を知るためであり、基礎的知識を使って実際問題を分析し解決する能力を知るためである。それは徳・知・体の各面から学生を選抜するためであって、高校の教科書の内容をどれだけ暗記しているか試験するためではない。

もし学生の選抜にあたって、教養だけを見ることにし、教養は試験だけにと

より、試験はもっぱら書物についてだけ試験をすることになれば、労働者・農民から遊離した資本主義的な「門を閉ざして書を読む」という道へ青年を引きもどすことは容易なことである。被推薦者の思想・教養の実際の水準を理解するために、種々の形式を採用して調査研究をすすめなければならないのであって、難しい、奇襲攻撃をかけるような試験の方法を用いたり、答案一枚だけで実践の経験をもつ労働者・農民の才智と思想的自覚を評価してはならない。

新しい学生募集の制度は、広大な労働者・農民・兵士大衆に依拠せねばならない。封建社会の科举と修正主義の教育路線支配下の入学試験は、試験官の手によるものだった。試験官の権限は搾取階級の教育の分野における独裁の象徴である。

大学生募集の権限を大衆に渡すことは、プロレタリアートの指導と労・農大衆の教育事業に対する監督を実現するものである。大衆による推薦は基本的な一環であって、一時的なものであってはならない。誰が大学へ進む条件に合致しているかについては、大衆がもっともよく知っている。誰を推薦すべきかについては大衆がもっとも発言権をもっている。大衆に背いて少数の者が決定するやり方は間違いである。

労働者・農民・兵士の中から大学生を選抜するやり方は、ここ数年の実践を経て、あきらかに優れており強い生命力を表わしている。20才前後の年令で、労働者・貧農・下層中農から思想的に教育されることは、彼らの世界観の改革にとって重要な意義をもっている。彼らは自分が大学へ進むことは階級のおかげであり、階級の委託を受けていることを、はっきり認識している。これは誰のために学習するのかという問題を解決するための、すぐれた思想的基礎をすえたことである。卒業後、彼らの絶対多数の者は気はつらつとして三大革命運動の第一線に帰ってゆき、大衆と一丸となっている。古い大学は青年を労働者・農民から遊離するよう導いて、労働者・農民の子弟が大学に入ってもブルジョア思想の腐蝕をこうむらせ、「一年目は土くさいが、二年目は外国かぶれし、三年目には父母のことなど忘れてしまう」状態だったのとは、全く異なる。

実践の経験をもつ労働者・農民の中から学生を選抜すべきであるとする毛主席の“7.21”指示は、理工科の大学がどのようにすべきかについて、まずはっ

きりと述べている。しかるに奇談怪論者はわざわざこの問題について反対を唱えて、理科は「高校生から選抜して、大学へ直接進むべきである」と強調している。プロ文革以前のように高校生が大学に直接進学する募集制度を復活することは、毛主席の“7.21”指示を否定するものである。もしそのようにすれば毛主席の教育革命に関する一連の指示は捨て去られてしまう。知識青年が農村・山村へゆき、労働者・農民と結びつく道も攻撃され否定されてしまう。

そうすることは修正主義の教育路線に方向転換し、エリートを選抜するブルジョア教育を行い、学生を小さな塔によじ登らせるよう誘導することになる。すなわち、ブルジョア階級のエリートになるための階段に誘導することになる。同時にまた広範な労働者・農民・兵士を再び高等教育機関から排除することになる。プロレタリアに対してブルジョアが独裁権力をふるった歴史をくり返すことは絶対に許すことはできない。

(五) 大学教育の改革

学生募集の方法が改革されたことにより、大学教育の対象が異なり、養成の目標が異なって来た。このことは、大学の授業を根本的に変革させることになる。労働者・農民・兵士出身の学生が大学へ入学して以後、大学の授業の方針・内容・方法および教師団、等の各面に影響をおよぼした。とくに「理論と実際の統一」の原則を実行することと、「教育はプロレタリアートの政治に奉仕しなければならない」という方針の実践に対して大きな影響をもたらした。修正主義の教育路線は「教育は知識を教授することである」として、教育が政治から超越しているかのように言うが、これこそブルジョア的な教育観である。彼らが教授する知識には修正主義的・ブルジョア的・その他搾取階級の反動的観点がしみ込んでおり、その目的は教育をブルジョア独裁の道具に変えて、ブルジョアのエリートを養成することにある。

しかしながら社会主義の自覚をもち教養ある労働者を養成するには、学生の徳育・知育・体育の各面を発展させねばならない。この三つの中で徳育がすべてに優先し、首位を占める。知育と体育の方向を決定するのは徳育であり、中国と世界の大多数の人民のために奉仕するという課題を解決するためである。

すなわち階級斗争と路線斗争について高い自覚をもち、プロレタリア独裁のために闘う戦士を養成せねばならないという前提のもとに、教養を学び身体をきたえるのである。プロレタリアートの政治優先のもとに知育と体育を発展させてのみ、学生はプロレタリア革命事業の後継者となるのである。

「知育第一」を批判することは、知育を軽視することではない。社会主義革命と建設は、青少年がより豊かな社会主義的な教養を身につけることを必要としている。しかしそれは修正主義の「知育第一」とは本質的な差異がある。我々はプロレタリアートの政治優先という前提のもとでの知育として考えている。もし修正主義の「知育第一」によって、プロレタリアートの政治の方向が否定されて、教師と学生が専門の勉強をするだけで、政治を忘れ、プロ独裁を忘れれば、再びブルジョア知識人が大学を支配することになり、大学は資本主義復活のための道具となるだろう。

プロレタリアートの知育について論ずるばあい重要なことは三大革命運動についての実際の知識をどれだけ学んでいるかであり、その中で理論を実際に結びつけて問題を分析し解決する能力について見るべきであって、単純に書物の知識を学生がどれだけ掌握しているかを見るべきではない。

階級斗争と生産斗争の知識を学ぶには、教育を生産労働と結びつけねばならないし、門を開いて学校を運営するやり方を実行し続けなければならない。古い学校は課目が多すぎ、試験は学生に対して奇襲攻撃のやり方をとり、学生をだいなしにしていた。

数年来、教育戦線では毛主席の教えにもとづいて、「門を開いて学校を運営する」ことをひろく実行し、古い枠を打ち破って、教育と生産労働、理論と実際、を結びつけた。学生は精神的に大きく変化をとげただけでなく、より完全な知識を学び、体力も勉強だけしていた時に比較して、ずっと強くなっている。このことは、「門を開いて学校を運営する」ことが、徳育を立派にやって学生の思想教育を強化するために必要なだけでなく、知育と体育を立派にやるためにも必要であることを物語っている。教育戦線に出現した社会主義の数多くの新しい事物は、強い生命力をもっている。これらの新しく生れた事物を大切に、不断に改善してゆかねばならない。

教育をプロレタリアの政治に奉仕させ、生産労働と結びつける方針を堅持して、門を開いて学校運営をやる過程で、教師と学生は労働者・農民と結びつき、教育と生産労働、理論と実際を結びつける努力をして来た。

例えば北京大学文科は社会を工場とし、批林批孔と緊密に結びつき、プロ独裁の理論を学び、最近は《水滸》を論評する授業を組織して、哲学・経済・文学・歴史等の各学科の改革を推し進めた。歴史の課程を例に挙げれば、以前は「英雄が歴史を創造する」という唯心史観を宣伝したが、現在では労働人民の歴史上の役割を述べることに努力している。以前は「尊儒反法」(儒家を尊び、法家に反対する)であったが、現在では法家を正しく評価するよう努力し、儒家を批判している。以前は「厚古薄今」であったが、現在では「古為今用」の方針を貫徹し、歴史の経験を総括して、実際の斗争のために奉仕している。

清華大学では、基礎課——技術基礎課——専門課という三段階の旧体系を打ち破って、典型的な任務に結びつけて授業をすすめる、学生の学習を社会主義革命と建設に結びつけた。ここ数年の間に、千項目にのぼる生産と科学研究の任務を完成させている。水利系(学部)は黄河を教室とし、黄河の治水と農業のために奉仕することを堅持している。黄河の泥を治めることを専攻する学生12名と教師3名は山東省の某地にゆき、「黄河を導いて泥を棄てる」という科学研究の任務と結びつけて授業をすすめている。彼らは地元の党委員会の指導のもとに、貧農・下層中農に学び、書物の古い枠を打ち破って、泥を棄てる工事の設計を完成させた。広範な大衆の奮闘と関係部門の支持を得て、この工事は今年一回で、5万1千7百畝(1畝は約6.6アール)の良田を造成した。学生たちは「農業は大衆に学ぶ」ことに貢献しただけでなく、豊富な実際の知識を学びとり、その上、理論的に新しい見解を得たのである。

化学工業系の2年生は、中国の技術的空白を埋める化学工業の設計を完成した後、教師と学生は共同で《化工車間設計》(化学工業現場設計)など2冊の教材と論文を著わして、労働者の実践的経験を総括し、設計における独創的な6項目の改革について理論的に説明を加えたのである。

以上によって明らかのように、門を開いて学校を運営し、典型的な任務と結びつけて、授業をすすめることは、まさしく終始「実践・認識・再実践・再認

識」の原則を貫徹するものであり、実践を基礎として学生を理論面の学習に向かわせる過程である。

社会主義の大学は、プロレタリアの教育の質を不断に高めなければならない。プロレタリアの政治でもって専門を統帥し、革命のために教養と科学知識を学ぶことに努力し、人民のために奉仕するための真の実力をつけなければならない。

学生は三大革命運動の実践に積極的に参加して、労働者・農民と結びつき、革命のために学ぶという正しい目的を樹立してのみ、真に強大な学習意欲をもつことができるし、不屈の精神力をもって、科学と文化の砦を一つ一つ攻め陥すことができる。教育革命に立脚して、封建的・資本主義的・修正主義的な学科の体系を批判し、古い授業内容と方法を徹底的に改革し、「実践——認識——実践」というマルクス主義の認識路線によって、授業を組織して、はじめて役にたつ書物の知識を学生に学ばせることができると共に、ゆたかな実際の知識を掌握し、問題を分析し解決する能力を育成することに精力を集中できるのである。

教育の質の問題は一定の階級・路線と関連がある。階級が異なれば質の基準も異なってくる。修正主義の教育路線の目標はエリート養成であるが、プロレタリアートの教育路線は社会主義の自覚をもち教養ある労働者を養成することである。

政治について見ると修正主義の教育路線は「学んで優れば仕える」という儒家の反動思想を公然と鼓吹して、ブルジョアの権利意識を学生にそそぎ込み学生が入学すると同時に「学問して役人になり」、立身出世するようそそのかした。こうして、学生たちは最後の血の一滴まで流しても世間をあっと言わせてやろうと決心することになり、政治的には通過できればよいということになってしまった。しかし通過できればよいと考える者はしばしば通過できないものである。ひと度、嵐に遇うとすぐ右往左往して、反動になってしまう場合さえある。このような学生の政治的水準は、社会主義の自覚をもった労働者・農民・兵士出身の学生とは比較にならない。

専門についても同じである。文革前はブルジョア階級の学者が教育界の「中心人物」であったが、彼ら自身は理論が実際から遊離していた。従って旧い学校で学んだ昔ながらの書物の知識を青年の頭に詰め込むことしかできなかった。小学校から大学まで門を閉じて十数年間も勉強した結果が、哲学を勉強しても矛盾を分析できなかつたり、文学を学んでも創作がやれなかつたり、歴史を学んでも帝王将相の家系を暗記することしかできず、史的唯物論を用いて歴史的経験を総括できない。こういう学生のマルクス・レーニン主義の思想的水準と実際問題を分析し解決する能力について言えば、彼等の多くは、今日の学生に遙かに及ばないのである。

教育界の奇談怪論者は、知育第一の立場から問題を見慣れており、知育はまた書物からの知識の教育を最も重要なものと考えている。しかし路線を離れて授業の質の問題を議論することはできない。質について見るには、まず政治の方向を見なければならぬ。学んだ量が多くても、方向が間違っておれば、何の役にも立たない。旧い教育制度は学生を学校に閉じ込めていた。労働者がどのように働いているのか、農民がどのように耕作するのか、学生は十数年間見ることもできない。長い間、丸暗記につとめ、勉強すればするほど馬鹿になり、階級斗争・生産斗争など現実の課題に出くわすと、たちまち浅薄さと無知を露呈してしまふ。これでどうして理論的に高いなどと言えようか。我々は勉強馬鹿を育成すべきではない。社会主義革命と建設の中で実際のはたらきのできる人材を育成せねばならないのである。学生が学校で何年間か学ぶことの目的は正しい世界観と方法論を確立し、基本的な理論的知識を身につけ、これらの知識を運用して問題を分析して解決する能力を養成することであり、それから以後は実践の中で不断に高めてゆくことができるのである。

ブルジョア階級がプロレタリアートの教育革命を攻撃する場合、きまって教育の質の問題について大いに書きたてる。教育の質については階級が異なればまったく見方も異なる。社会主義の大学が養成する学生は、プロ独裁を強固にし、社会主義建設のために奉仕しなければならない。従って、質について見る場合、まず方向について、そして路線について見なければならない。徳育・知

育・体育の全面的発展について見るべきである。たとえ専門の学習について見る場合でも、課目をどれだけ出席し、書物をどれだけ勉強したかを以って基準とすることは絶対にすべきではなく、理論と実際の統一、問題を分析し解決する能力を見るべきである。

旧北京大学と旧清華大学は「最高学府」とか「赤い技術者の生誕地」とか言われた。だが学生の多くは頭がおかしくなって方向を転換して、個人的な名利を追い求め、理論は実際から遊離していた。哲学を学ぶ者が哲学をやれず、文学を学ぶ者が小説を書けず、工科の学生が機械を操作したり組み立てることができず、理科の学生が象牙の塔の中で紙の上の戦争談議をすることしかできなかった。ある学生は苦労や死を恐れて、党と国家の配置に従わず、またある場合はブルジョア右派分子に墮落してしまった学生すらある。ところが現在の労働者・農民・兵士出身の学生は、何年かの学習を通じて、マルクス主義の理論水準と階級斗争・路線斗争の自覚は非常に高くなり、専門の学習も喜ばしい成績をあげている。学生のある者は発明・創造をおこなって在学中にすでに社会主義革命と建設事業のために貢献している。

清華大学機械系の溶接専攻の学生グループは、北京建築安裝公司の労働者・技術者と協同で外国の溶接技術の規格を打ち破って、マイナス百度の低温で鋼を溶接すること（負一百度低温用鋼的銲接）に成功した。電子系の制御（控制）専攻の学生5名と教師2名は、精密機器の労働者数名と共に迷信を打ち破って思想を解放し、大型電算機の図形発生器の研究試作に成功し、世界のトップ水準に到達している。

北京大学の国文系の学生は、火のような三大革命運動に身を投じて、革命の感激あふれる長詩《理想の歌》を創作し、出版して、広範な労働者・農民・兵士に歓迎された。地球物理系と地質地理系の学生は、雲南省の昭通地区と遼寧省の營口地区に地震が発生したニュースを聞くとすぐ罹災地域へかけつけ、余震が止まず山から落石がある状況の中で、生命の危険を冒して、人民大衆の財産を救出し、現場で科学的観察をおこなって貴重な資料を得たのである。

労働者・農民・兵士出身の学生の卒業実践の豊かな成果は、ブルジョア階級

のいう「質が低い」という談論を反駁するに十分である。

清華大学の一期・二期（両届）の卒業生は564項目の専門研究・生産任務そして重要な技術革新を完成させているが、それらの三分の一以上の項目は中国の最高水準あるいは国家の空白を埋める内容のものである。電子系72年度の学生が担当した12の項目はすべて中国の最高水準に達しており、その中の9つの項目は国家の空白を補填した。

北京大学文科の卒業生は戦斗的任務と結びつけて、書物を55冊著わし、定期刊行物に700余りの文章を発表した。外国語系の学生は16種類の言葉の250万字の資料を翻訳して、帝国主義と修正主義反対斗争のために奉仕した。理科の学生は393項目の科学研究のテーマを完成させ、79の項目は中国の最高水準に達している。その他の若干の項目は基礎理論の研究において重要な価値をもつものであった。

このように顕著な成績があがっており、対比はこれほどはっきりしているのに、なぜ質の問題について是非を顛倒させた種々の怪論が現われるのか。原因の一つには「知育第一」というブルジョア教育思想がある。我々は知育を重視することと「知育第一」との区別を故意に混同させて、人民大衆の科学・文化に対する切実な心情を利用して、再び「知育第一」という古い代物を持ち出そうと企んでいることに警戒すべきである。「知育第一」をやることは、古い教育制度により、もう一度人材をだめにし、青少年をだめにして、資本主義復活のために奉仕しようということである。周知の通り、ソ連修正主義裏切者集団の頭目は、すべて大学によって養成されたいわゆる「赤色専門家」であり彼らは史上最初の社会主義国家をば社会帝国主義に変えてしまった。「衛星は打ち上げたが、紅旗は地に落ちた」この歴史的教訓を、社会主義建設の時期に我々は特に忘れてはならないのである。

（六）大学卒業生の就職

毛主席の指示に見る通り、「実践の経験をもつ労働者・農民の中から大学生を選抜し、何年か学んだ後、再び生産の実践にもどってゆく」ことは、学問を

して出世するというエリート養成の大学教育の否定である。労働者・農民と結びついて、階級斗争・生産斗争の推進力として大学卒業生は存在する。

遼寧省の朝陽農業大学の例でいうと、農大を卒業して、農民になり、賃金を受けるやり方は、貧農・下層中農から熱烈な歓迎を受けているという。この方向は、修正主義に反対し、修正主義を防せぎ、プロレタリア独裁を強固にし、ブルジョアの権利を制限し、次第に三大差別を縮小して、農村の建設を強化し、社会主義農業を発展させることにおいて深遠な意義がある。

社会主義の自覚をもち教養ある労働者を養成して、知識人の労働者化と労働人民の知識人化を実現して、都市と農村、工業と農業、頭脳労働と肉体労働、の差を一步一步縮小してゆく努力をさせねばならない。

「人民公社から来て人民公社にもどる」やり方を実行することは、数千年来の「勉強して出世する」という古い伝統を否定し、ブルジョアの権利に向って勇敢に戦いを挑んでいるのであり、パリ・コミューンを実現させているのであり、社会主義の段階における連続革命の具体的な段取りを堅持しているのである。

しかるに、「労働者や農民を養成するのならば、このような大学はやめてしまおう方がよい」とか、「幹部・技術者を養成しないのに、それでもなお大学をやらうとするのは何のためか」という事を言う者がいる。

彼等が考えている「幹部」なり、「技術者」なりは、労働者・農民には絶対になってはいけない人材なのである。彼等が養成しようとする「幹部」と「技術者」は、我々が言うような平凡な労働者の姿をとって現われる広大な幹部ではありえないし、労働者・農民と共に呼吸し、運命を共にするプロレタリア階級の知識人でもない。プロ文革前の17年間、旧大学が鼓吹した「赤い農学者」「園芸家」「高級建設要員」などと同じものであって、いずれも労働者・農民大衆の上にあぐらをかく「精神貴族」でしかない。彼等の論理によれば、労働者・農民を養成するのに、大学へ進学する必要はないし、もし大学に進学したら労働者や農民になるべきではないし、労働者や農民と同等であるべきではないのである。これは言いかえれば、永久に頭脳労働と肉体労働の差を保持すべきであり、永久に少数の特権者によって文化・科学を独占させるべきだとい

うことに他ならない。そういう場合は、すでに資本主義を復活させたソ連を見れば明らかなことである。そこでは大学の門をくぐりさえすれば、特権階級の階段を登ったに等しく、労働人民を圧迫し搾取する特権を獲得したに等しい。大学生が労働者や農民になることに反対することは、ソ連修正主義の後塵を拝するつもりなのである。

(七) 労働者階級による指導

教育革命を堅持するには労働者階級の指導がなければならない。党の統一的指導のもとに、労働者宣伝隊が長期間大学に滞在して、大学の斗争・批判・改革の任務に参加して、永久に大学を指導しなければならない。

1968年7月27日、労働者・解放軍の宣伝隊が大学に進駐して以後、清華大学と北京大学は毛主席の革命路線の指導の下に、プロレタリア教育革命が活き活きと発展し、広大な労働者・農民・兵士出身の学生が速やかに成長し、知識人の隊伍に深刻な変化が生じている。

ブルジョア階級が翻案・復活の運動をやる時は、きまって労働者階級の指導に対して気狂いのように反対する。1957年右派分子は「素人は玄人を指導できない」と大いに宣伝したが、彼等は科学を発展させようと考えてなどいるのではなく、共産党を大学から追い出そうとして「教授による学校統治」すなわちブルジョア階級による学校支配をやろうとしたのである。

いわゆる「科学に熱意のある素人が指導しなければならない」ということも実質は階級的内容を抜き去るという手法でもって、「労働者階級が一切を指導すべきである」という毛主席の指示を骨抜きにしようとするものである。なぜはっきりと「素人には玄人を指導できない」と言わないのか。そういう言い方はとてもできないので、「素人は玄人を指導できる」というスローガンを形式的に引き継いで、「科学に熱意のある」という修飾語を「素人」の前に加えることによって、労働者階級による指導に対し「科学に熱意がない」といういわれなき罪名を以って一挙にくつがえして、ブルジョア階級の政治を「熱心に」やる者に教育の分野の指導権をにぎらせようと企んでいるのである。これが彼等の教育問題「解決」の根本的なやり方なのである。

文化大革命前に、党は幾度も幹部を清華・北京兩大学に派遣したことがある。しかし文化大革命前は、清華・北大は封建主義・資本主義・修正主義の勢力が根をはって攻め陥すことができなかった。労働者・解放軍の宣伝隊が大学に進駐する以前は、斗争をやらす、批判をやらす、改革をやらすだったが、ここ数年来、大学には天地をくつがえすような変化がうまれている。その根本の原因は、プロ文革によって劉少奇ブルジョア司令部による教育戦線における反革命の独裁を打ち砕き、宣伝隊の学内進駐に対する林彪一派の妨害と破壊を砕碎して、労働者階級の大学における指導権を確立したからである。

大学は階級斗争の重要な陣地であって単に知識を教えたり科学のための科学をやる所では決してない。文化大革命以前と以後の清華・北大の正・反両面の経験はいずれも「プロレタリア教育革命を実現するには、労働者階級の指導がなければならない」という真理の偉大さを証明している。

労働者階級は最も先進的で革命的な階級である。搾取階級のために奉仕した古い教育制度を誰よりも憎んでおり、そして階級斗争・生産斗争・科学実験という三大革命運動の豊かな経験をもっている。

党の一元的指導のもとに労働者階級が教育の陣地を占領して、はじめて学校をプロ独裁の道具に改革できるし、授業・科学研究その他一切の仕事を正しい路線に沿って、活き活きと発展させることができる。大学へ進駐した労働者宣伝隊の多くの同志たちは、皆次のような感想をもっている。教育の陣地における階級斗争・路線斗争は複雑で尖鋭である。労働者階級の立場をしっかりと持たねばならないし、不断に自己の路線斗争の自覚を高めてゆかねばならない。断固として修正主義と斗い、ブルジョア階級の糖衣爆弾に当たらないよう警戒しなければならない。このようにして教育革命の光栄ある任務を堅持してゆけるのである、と。

(八) 教育改革の継続的發展

教育の根本的な革命は数年前に始まったばかりである。それは生れ出ると強大無比の生命力を表わして輝やかな未来を指し示している。それは革命のあらゆる新生の事物がそうであるのと同じく發展と不断の改善の過程を経なければ

ばならない。

我々の仕事には学習と経験を積む過程があり、我々の教育の水準はここで止まるのではなく、なお発展し高まりつつある。

マルクス主義者は問題を見る時、本質と主流を見なければならない。本質的でない側面や主流でない側面の問題ももちろん粗略にすべきでなく、漸時それらを解決してゆくべきである。しかしもしも新生の事物の完全でない箇所をとりあげ、若干の同志たちの一時的な無理解と不適応の状況を利用して、教育革命の主流と方向を否定したりすれば、広範な革命的大衆は決して承知しないだろう。

教育革命の勝利は、プロ文革の偉大なる勝利の重要な構成部分である。教育界の怪論は修正主義の教育路線のため翻案を企て、文化大革命を否定し、毛主席の革命路線を改変しようとしている。教育界に現われた奇談怪論は決して孤立した現象ではなく、これは二つの階級・二つの道・二つの路線の斗争の反映である。革命の過程では少数の者が飛び出して来て新生の事物に反対し、古い事物を必死になって擁護しようとする。奇談怪論の製造屋たちは旧いやり方を復活しようとして、修正主義の教育路線の支配下にあった17年間を悼み、文化大革命前の旧い大学と修正主義の教育制度を悼んでいるのである。しかし、教育戦線における深刻な変化は、まさに17年間の旧教育を批判する過程から現われたものである。奇談怪論の製造屋が教育戦線“17年”のために捲き返しをやろうとするのは、教育革命全体を否定しようとして、教育の分野から始められた偉大なプロレタリア文化大革命を否定しようとするものであり、プロレタリアートと労働人民が社会主義の新しい世界を建設する革命の奔流を阻止しようと考えているからである。修正主義は依然当面の主要な危険物である。

教育革命は大きな社会革命であり、プロ独裁を強固にするための重要事であり、数世代の堅忍不拔の努力を経なければならない。

大学・中学・小学の学生数は全人口の五分の一前後を占めている。マルクス・レーニン主義、毛沢東思想でもって青少年をプロレタリア革命事業の後継者に養成することは、党と國家が変色しないようにするための百年の大計に関連してゆく。文化大革命前の17年間の旧い大学はブルジョア知識人の支配の

もとに、広大な労働者・農民・兵士を学外に閉め出して、資本主義復活のために、「精神貴族」と修正主義の卵を養成していた。プロ文革はこの修正主義の路線を批判して、大学は、労・農・兵に向って門を開き、労・農・兵の中から学生を選抜し、卒業後はふたたび労・農・兵の中にもどってゆくようにして、許多のプロレタリア革命事業の後継者を養成し、育成するよう要請したのである。

我々はプロ独裁の理論をまじめに学習し、マルクス・レーニンと毛主席の教育革命の思想を学習し、修正主義を批判し、プルジョアを批判しなければならない。毛主席の革命路線の指導のもとに、団結できるすべての力を団結し、積極的要素を動員して、階級斗争を綱として、プロレタリアの教育革命を徹底的に推進しなければならない。